

国立公文書館内閣文庫所蔵『大外記師資記』

—翻刻と改題 その一—

福 田 道 宏

(2013年1月9日受理)

Daigeki Morotoshi ki : Decipherment and Annotation I

FUKUDA Michihiro

はじめに―押小路師資について

押小路師資（一七四四―一八〇二）は、十八世紀後半、朝廷の実務を取り仕切った官人である。朝廷社会にあつてその末端に連なる彼ら官人を、地下官人という。朝廷は大雑把に言えばふたつの階層に分けられる。生まれながらにして、昇殿を聴される家柄と、原則として聴されない家柄とである。前者を堂上公卿といい、後者が地下官人である。地下官人の多くは、朝儀の頭数を揃えるために動員されるばかりで、それ以外にほとんど仕事のない者たちだが、なかには稀にそうした朝儀を維持し、現実政治の場ではないにせよ、朝廷を運営してゆくための実務に従事した者もある。本稿で採り上げる押小路家もそのひとつで、ここでは、押小路師資の遺した日記を翻刻するとともに、若干の解題を附して紹介する。

地下官人各家の系譜と履歴をまとめた『地下家伝』二の大外記「押小路」によると大外記押小路家の初代は、十市春宗の男で、延喜二年（九〇二）生まれ、天禄二年（九七一）九月に十市宿禰の姓を中原宿禰と改め、さらに天延二年（九七四）十二月に宿禰を改め朝臣を賜った有象である。師資は、有象から数えて三十二代目にあたる。少々長くなるが、『地下家伝』の師資の条を引用する。

中原師資

中原師亮男、実左大史小機
盈春末子、母平原師守女

寛保四年正月一日

誕生

宝暦四年十一月廿四日

元服^{十一歳}

同日

叙従五位下

同日

任大外記

同年十二月廿六日

兼造酒正

同五年六月十五日

兼掃部頭

同六年十月八日

除服出仕

同七年五月九日

除服出仕

同九年十月十九日

除服出仕

同十年三月十九日

叙従五位上^{十七歳}

同年七月十九日

除服出仕

明和元年八月廿四日

為大嘗会主基行事

同三年二月二十日

叙正五位下^{廿二歳}

同五年九月十五日

除服出仕

同六年五月二日	除服出仕
同七年十二月八日	除服出仕
同八年九月八日	為大嘗会主基行事
同九年二月十三日	叙正五位上 <small>廿九歳</small>
安永五年正月十九日	叙従四位下 <small>三十三歳</small>
同年十二月二日	除服出仕
同九年十二月十九日	辞造酒正
天明元年八月二日	除服出仕
同二年十二月廿二日	叙従四位上 <small>三十九歳</small>
同四年十一月三日	除服出仕
同六年七月二十日	除服出仕
同年十一月十日	辞掃部頭
同年十二月十九日	兼助教
同八年五月十七日	除服出仕
同年十一月四日	叙正四位下 <small>四十五歳</small>
寛政六年後十一月四日	叙正四位上 <small>五十一歳</small>
同八年七月二十日	除服出仕
同九年十二月十九日	除服出仕復任
同十三年正月十六日	除服出仕
享和元年六月廿六日	叙従三位 <small>五十八歳</small>
同月廿七日	薨

これによれば、押小路師資（おしこうじ もろとし）は、姓は中原、寛保四年（一七四四）一月一日生まれで、享和元年（一八〇二）六月二十七日に薨去。享年五十八。先代は押小路師充（一七三〇～一七五四）だが、実は小槻盈春、つまり押小路家と並んで地下官人の棟梁とされた官務壬生家の壬生盈春（一七一〇～一七五九）の末子で、師充の養子、母は先々代押小路師守（一七一四～一七四四）の女、という。

当時、押小路家では早世が続いており、数代にわたって養子相続が行われ、先代師充も壬生盈春の二男で、先々代師守の養子であるため、師資の異母兄である。さらに師守も盈春の父壬生章弘（一六七四～一七一七）の二男で、その先代押小路師岑（一六九〇

（一七二四）の養子となったひとである。ちなみに壬生家もこれより少し前に二代にわたって養子相続が続き、押小路師資の祖父にあたる壬生章弘は『地下家伝』に「実者、広橋大納言綏光卿次男」と註記されている。のちに掲げる翻刻の冒頭で、師資の相続の経緯について別紙が貼り込まれ、「広橋兼胤公記」からという引用があるが、「大外記師資記」が記され始めた当時、武家伝奏をつとめた大納言広橋兼胤（一七一五～一七八一、安永九年（一七八〇）勝胤と改名）は、師充・師資兄弟にとって、遠縁（はこの子）ながら親戚になる（図1）。兼胤も単に武家伝奏という役柄からではなく、縁戚にあたるため日記に押小路家の相続について記したのであろうし、師資も参照出来たのだらう。

『地下家伝』によれば、師資の異母兄で、押小路家先代の師充は宝暦四年九月四日、二十五歳で卒去しているが、翻刻中の「広橋兼胤公記」によれば、その二日前の九月二日に「病氣危急」のため、壬生盈春の末子富丸を養子とすることを摂政一条道香に願ひ出て、許されたという。師資の元服は『地下家伝』によると十一月二十四日で、同日、従五位下に叙され、大外記に任じられた。さらに一箇月後の十二月二十六日には造酒正を兼任、以後、官位は順調に累進、死の前日には従三位に叙された。

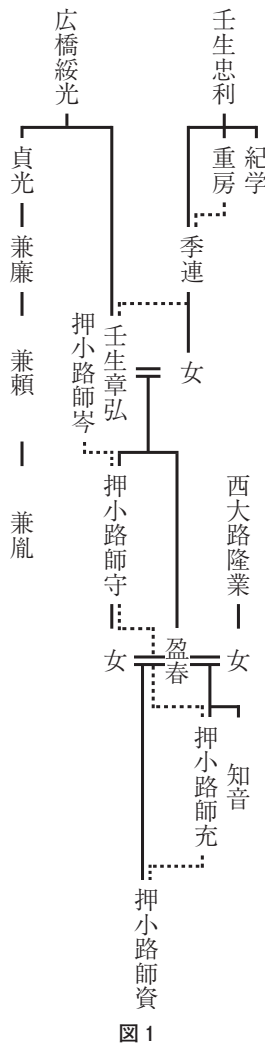


図1

さて、師資が相続した大外記押小路家だが、下橋敬長『幕末の宮廷』³には、

地下次第の三催の分掌は、初が外記方でございます。外記方は押小路大外記、これは身分は諸大夫でございます。尤も、是は格別の家柄でございますに依つて、正三位まで行きます。従五位下から正三位まで登ります。四位五位の間は大外記でございますが、三位になると、大外記は不相当でございますから、大外記を辞して仕舞ひます。跡を相続人が継いで大外記になります。自分は三位の諸大夫になります。諸大夫になると、地下次第の肩書のない所へ入ることになります。四位五位の間は、大外記の職掌を致しまして、後の使部までの所が、大外記の配下でございます。催と云ふ事は、ちよつと奇態ですが、今日催と云ふやうな事を言うたら、人様は御存知ない、無理な言ひやうですが、今日分りよいやうに申すと、催と云ふことは、支配頭とか、取締とか云ふことであります。催とは何ぢやいなと云ふことになりましたが、支配頭、或は一部分だけの取締、さう思召したら宜しうございます。

とある。では、師資の生家壬生家という点、同書に、「今度は官方でございます。壬生左大史、従五位下から昇って正三位に至る。三位になると位が高過ぎますから、左大史を辞さぬければなりません、辞しますと三位の諸大夫、肩書の無い所へ入ります」とある。地下官人とは、西村慎太郎によれば「朝廷に仕えた下級官人のことで、近世においては主に朝廷儀式の参仕および儀式調度品の調進を行った集団のことである。内裏の清涼殿に上される階層を「殿上人」「堂上」と言うが、「地下」は「昇殿をゆるされざるものの通称」で、堂上と地下との間には「越ゆべからざる断層」「厳重な一線」があつたと評価されている」といい、次のようにまとめる。

・近世地下官人の階層は三つに分けられ、それぞれ催官人・並官人・下官人と称された。
 ・催官人は押小路家(局務)・壬生家(官務)・平田家の三家(三催と称された)で、それぞれ外記方・官方・蔵人方という地下官人集団を統轄した。そのほか、三家に統轄されない地下官人もいる。それらは直接蔵人頭などの堂上公家によって統轄された。⁶⁾

また、西村は地下官人の組織を三催、催官人三家の存在形態をもとに検討するなかで、本稿で翻刻を掲げる押小路師資の「大外記師資記」のうち安永六年(一七七七)の一年間の事例をもとに、押小路家の役割として、

- ① 諸公事(朝廷儀式)の伝達・管轄
- ② 伝奏触の伝達
- ③ 外記方官人の諸公事不参伝達
- ④ 外記方官人退役・相統の管理
- ⑤ 外記方官人昇進の管理
- ⑥ 外記方官人親族死去による朝廷への届け出

を挙げている。⁷⁾もちろん、外記は太政官(だいじょうかん)の外記局に由来し、地下官人相互の関係以外では、日常的に文書の作成などにも携わっていて、朝廷にはなくてはならない、なければ支障をきたす存在であった。だからこそ、師充から師資への末期養子もすんなりと認められたのだろう。

さて、下橋は、押小路家は「格別の家柄」のため、正三位まで昇ると記す。同様に壬生家についても正三位まで叙されるとも書いている。しかし、師資は、先述の通り、薨去の前日に従三位に叙されたが、正三位にはなっていない。この点について見ておくと、

『地下家伝』及び『幕末公家集成』⁸で確認すると、押小路家歴代の中で初めて従三位に叙されたのが、ほかならぬ師資であり、以後、三代あとの師徳（一七九九～一八四六）が多年の勤仕と、「所労危急」を考慮して、格別の配慮によって、死の二日前に従三位に叙された二例しかない。また、壬生家で見ると、師資の実父盈春が死の前日に従三位、その子で師資の長兄知音（一七二九～一七七六）も死の二日前に従三位、知音の孫以寧（一七九三～一八四六）も死の二日前に従三位であり、それ以前には極位は正四位上であった。両家とも年代の古い歴代に関しては、履歴が詳細でないものもあり、脱漏がないとも限らないが、上記、押小路師資・師徳、壬生盈春・知音・以寧の死のみ「薨」とあり、ほかはすべて「卒」または「死」であり、従三位以上に叙されてはいない。つまり、押小路家・壬生家とも従三位に叙されるようになったのは壬生盈春とその子以降であり、これには、盈春の父章弘が堂上公卿広橋家から養子入りのことも作用していた可能性があるだろう。

また、下橋は「三位になると、大外記は不相当でございますから、大外記を辞して仕舞ひます。跡を相続人が継いで大外記になり」とも記すが、押小路家では父が大外記在任中にも、その子が大外記に任じられており、また、すでに見たとおり、従三位に昇るのは死の数日前であることから、大外記を辞した記録はない。

「大外記師資記」について

現在、国立公文書館には押小路師資の宝暦五年（一七五五）から寛政十年（一七九八）の日記三十七冊が所蔵されている。今回、翻刻するのはその第一冊の冒頭部分である。これを記したとき、師資はいまだ数えて十二歳であり、今日でいえば小学生である。彼はさきに見たように前年の秋に、押小路家に養子に来ていた実兄の病気が重くなったため、急遽、兄の養子となり、元服して、幼名「富丸」から「師資」に改名したばかりであった。そんな若い師資だが、朝廷社会を或る意味で背負って立つ、押小路家の当主として、装束をつけ、供を連れて参内もし、仕事もこなし、欠かすことなく日記をつけている。さらに驚くべきは字である。とても小学生と同じ年頃の子どもの書いた字とは思えないほど、しっかりしている。

師資の日記のほかにも同館には歴代の日記が収蔵されており、師資から六代ほどさかのぼった師定（一六二〇～一六七六）の「師定朝臣記」はじめ、師庸（一六五〇～一七二五）、師英（一六七九～一七一八）、師岑、師守、師充の日記が含まれている。師資以後も、その子師武（一七七〇～一八〇六）の「大外記師武記」四十冊をはじめ、師賛（一七九八～一八一〇）、師徳、師身（一八一九～）、師親（一八二八～一八七九）と続き、明治四年（一八七二）までの日記が所蔵される。つまり、一七世紀から十九世紀、江戸時代をほぼ網羅したものである。

さきに、師資が数えわずか十一歳で相続して、十二歳正月からの日記が残ることには触れたが、歴代の日記を見てみると、これは驚くにはあたらないのかもしれない。歴代の日記のなかには師英や、師資以下の師武、師賛、師徳のように十歳前後で日記をつけ始める例は多い。そしてこれらは師資のように父や先代を亡くして自らが当主だったという訳ではなく、父の日記と併行して記

されているのである。恐るべき英才教育というべきで、或る意味では当時の職業観をも表わすものだろう。やはり、江戸時代と現代の隔たりは大きい。

「大外記師資記」については、先述の通り、西村慎太郎によってその一部が紹介されている。その引用のなかに円山応挙門下の絵師山本守礼（一七五一〜九〇）が登場したことから、筆者も「山本守礼事績考―地下官人をめざす絵師たちの研究序説」¹⁰で、「大外記師資記」を用い、守礼が京都画壇の名門山本家を養子相続する以前、宝暦十四年（一七六四）亀岡主水守貞として兵庫寮下司鉦師に任じられたこと、明和七年（一七七〇）には守貞を守礼と改名したこと、安永五年（一七七六）亀岡を山本と改め、このころ山本家の養子となったこと、翌安永六年（一七七七）には「倅」という左門守義に役儀を譲って鉦師を退役したことなどを明らかにした。また、それ以前にも未発表ながら、やはり京都の絵師原在明（一七七八〜一八四四）の地下官人としての履歴を調べるため、閲覧調査し、頻度は少ないものの絵師の動向について、ほかでは得難い情報を含んでいることを見出した。

もちろん、本資料に含まれている情報は絵師に関するものだけではない。むしろ絵師の記事は稀であり、朝廷の儀式や、その次第、西村がさきの①から⑥にまとめたような統轄する官人たちの記事、公卿・官人はもちろん、武家や、全国各地の神職などの叙位任官の記事などがある。

通読するとすぐにわかることだが、正直なところ押小路家歴代の日記に、面白味はほとんどない。淡々と切れ間なく、日々のかわり映えのしない仕事について記しており、それも毎年毎年、延々同じことの繰り返しで、読んでいると退屈でさえある。これは、前近代の日記の性質とも関わるが、詳細な日記を遺すのは、子孫の仕事の参考としてであり、代々職を受け継いでゆく子孫にとっては、かわり映えのしない毎日こそが役に立つのである。私見や思いなど、個人的なことについてほとんど記すことがない。

しかし、或る意味、淡々と、切れ間なく日々記されるがゆえに重要でもある。歴史叙述は多くの場合、何事か事件をもとに、その前後を紡いで編まれてゆく。そもそも、ひとは当たり前のこと、いつもと変わらぬことにあまり注目しないし、意識すらしないことが多い。意識しないからこそ、記録したりもしない。つまり、歴史叙述に頻繁に現われるのは非日常であって、その背後にあって、時間的には大部分を占める日常ではない。ところが、押小路家の歴代は、事件がなくとも、子孫のため、日常を記し続けている。たとえば、さきの山本守礼の例で言えば、亀岡を山本と改めたこと、退役して倅守義に役儀を譲ったことは、ほぼ日常に属する記事である。一方、兵庫寮下司鉦師に任じられたこと、守貞を守礼と改名したことは非日常である。前者は、即位礼に不可欠の鉦師が宝暦十三年（一七六三）後桜町天皇の即位を目前に死去し、代役で済ませようとしたところ、代役ではまずいということになるなど、すったもんだの挙句、最終的に湯口祐光が現われて鉦師を勤めて、即位礼を乗り切り、それから間もなく、祐光が退役して、のちの守礼が跡目を継ぐという、一連の、しかし小さな小さな事件の一環である。また、後者は、ただ守貞を守礼と改名すると届け出たのではなく、絵師である守礼が仙洞御所造営で絵の御用を仰せ付けられ、絵師としては守礼と名乗ってしまった。同一人でありながら、朝廷において、鉦師としての名と、仙洞御所に絵を揮毫する絵師としての名の二つが相違することが物議をかもし、最終的に事後ではあるが、改名届を出すに至った、という小事件である。

これまで、宮廷画壇という観点から、絵師の動向をこうした文献史料のなかで拾ってきたが、押小路家の日記であれ、ほかの記録であれ、絵師が登場するのは多くの場合、非日常だが、最近になって、その背景としての日常が見えてこない、わからないことが多いのではいかとの思いを強くするようになった。ここではまず、その手始めとして、押小路師資と、彼の耳目を通して見た朝廷の退屈な日常にしばらく付き合ってみたいと思う。紙数も限られているので、内容の分析は別稿に譲ることにする。

【凡例】

- 一、本文中、常用漢字のあるものはこれを使用し、変体仮名は正字に改めた。ただし、助詞として用いられる江(え)・者(は)・茂(も)・与(と)・而(て)は旧字を存した。
- 一、本文には、読点および並列点を補った。
- 一、本文中、「」内は翻刻者の補注である。
- 一、抹消箇所は左傍にを付してこれを示した。

【翻刻】 国立公文書館内閣文庫所蔵「大外記師資記」

〔表紙〕

乙亥

宝暦五年

日次記

天

從正月一日

到二月廿七日

師資朝臣^{トシ}

〔表紙裏〕

目録

- 一、正月元日節会、予依重服不参、雖然文書悉調進了、
- 一、四日、御礼長橋奏者所公卿間ニテ右京大夫取次申上、此義明年元服ニ再興、年始今年初也、
- 一、廿九日、任大臣、宣下、宣旨持参両家、
- 一、二月十九日、復辟、御看献上ノ事、

一、廿四日、詔書覆奏、予依重服与奪ノ事、

〔表紙裏、別紙方眼紙貼込〕

広橋兼胤公記 宝暦四年九月二日、大外記師充病氣危急之处、依無相統之男、官務末子富丸^{開光}致養子度由師充願、撰政殿^江申入候处、願之通可申渡之如被命^{急心得別當へも申入、}

〔見返（表紙②）裏〕

宝暦五乙亥年從正月朔日

至二月廿七日

日次記

十二歳

大外記兼造酒正師資

〔見返（表紙②）裏〕

目録

元日節会、予依重服不参、雖然文書悉認、座方等例之通令調進事、

三日、吉書御覽、予出仕之事、

四日、年始御礼於公卿間、右京大夫取次^{三而}申上ル事、

十八日、所司代へ参賀ノ事、

廿四日、宣旨十五卷、伝^江奏^令附事、

廿九日、任大臣、九条・醍醐、

二月朔日、日蝕、

春日祭見参与奪ノ事、

四日、去々年大歌所別当宣旨、副使料百疋□今日出候事、

五日、文殿家故障ノ事、

内藏寮叙爵小折紙出ル事、十二日、右不及御沙汰事、

九日、覆辟伝奏ノ事、頭弁被参事、

十八日、詔書覆 奏執筆窺ノ事、

十九日、復辟ノ事、
廿日、右執筆二藤外記へ与奪ノ事、
廿一日、殿下給御盃事、
廿六日、内豎覆奏、右衛門尉故障事、

「本文」

主上 御諱 遐仁 天齡十五歳 御徳日 辰・戌
女院 青衿 門院 御歳四十 御徳日 卯・酉

摂政 道香公 二月十九日復辟為関白

議奏

醍醐大納言 正廿九 任内大臣

姉小路大納言

三条大納言

葉室中納言

東久世宰相

五辻治部卿

武家伝 奏

二 広橋大納言

一 柳原副大納言 正月廿九日 遷任

両頭

油小路頭左中将

清閑寺頭右大弁 二ノ一 転左大弁

五位職事

万里小路権右中弁 二ノ二 転右中弁 権佐使等如故

日野左少弁 二ノ五 転権右中弁 右同断

勸修寺右少弁 二ノ五 転左少弁

兼潔卿 公文卿 公積卿 頼要卿 通積卿 盛仲卿 兼胤卿 光綱卿 隆前朝臣 益房朝臣 韶房 資枝 敬明

宝暦五年乙亥

正月大

元日 乙亥

天晴朝之内

一、今日子ノ半刻、四方拝如例、

出御

奉行 権右中弁韶房

撰政殿御不参、

御座被設、如例参役輩記于左、

木工寮 弘充、主殿寮 助成威・権助職秀、掃部寮 助藤原利尹、内豎 珍之・中原康博、藏人方出納職方

以下如例参仕云云、卯ノ刻相濟、座方悉撤之、各退出云云、

当寮座方如例

参役外記方交名、旧冬奉行へ令注進也、

賀儀如例、

申刻節会、予依故障重服不参、官務 左大史知音被参、

奉行頭左中将隆前朝臣、

出御、撰政殿御不参、

公卿散狀記于左、

元日節会

公卿

近衛 左大臣

内前公

久我 右大臣

道兄公

西園寺大納言

公晃卿

勸修寺大納言

顯道卿

庭田 権中納言

重熙卿

兼行 新中納言

道貫卿

花山院 右兵衛督

兼濟卿

同 正親町中納言

實連卿

山科宰相

頼言卿

山本 新宰相

實觀卿

四辻 新宰相中将

実胤卿

山井 大藏卿

氏栄卿

今出川 新三位中将

公言卿

出陣難床子能雄事
備立美言命使復床
加藤例

同 諸酒後早出復床

少納言

西洞院 時名朝臣

弁

勘解由小路 資望朝臣

次将

左

武者小路 実岳朝臣

滋野升 公麗朝臣

大炊御門 家孝朝臣

右

風早 公雄朝臣

高野 隆古朝臣

戊半刻出 御、謝酒中□入御

内弁 右大臣 道兄公

見参 次侍從 非侍從 外任奏

官務盈春宿欄へ当日以使相頼、陣前奉行内見之處相違無之云云、

戊ノ刻、陣儀被始、其次第如例、上卿起座暫時而節会始ル如例、

勸盃 造酒正代内豎康昆臨胡被 仰出、

一、申ノ刻、当寮調進座方如例、令調進之但殿下依脚不参門、座二九不調進之也、丑ノ刻相濟座悉撤之、各退出、

二、今日、奉行諸司交名注進

元日節会参仕

外記方

權少外記 中原友興

史生 宗岡行本

史生 宗岡経義

召使 宗岡行春

使部

〔以下、下段は上下反転して記す〕

中務省

少丞 重美

内記局

少内記

友俊

陣官人

左近衛将曹

右近衛将監

造酒司

源元秀

橘久次

高丘 敬季朝臣

今城 定興朝臣

大原 重度朝臣

冷泉 為泰朝臣

大膳職

代

小野久弘依殿口合
大江盛林

佑

大江盛林

掃部寮二天

内豎二天

珍之

助

藤原利一

中原康博

権助

藤原利尹

大舎人二天

高橋景政

大允

藤原義休

一、勸修寺大納言令申ノ刻可有着陣、昨日依申越、於庭上着陣之儀、官務宿禰以使部、被催候処、臨胡不参陣相止云云、

二日 丙子 天晴

一、吉書御覽刻限已半刻、先達而被触候処、依御急辰ノ刻参集之旨、官務申合、以使部相触也、

三日 丁丑 天晴

一、吉書御覽参仕交名、奉行頭弁益房亭以使進之、記于左、

一、上卿進退不被継床子、

吉書御覽参仕

外記方

当寮調進

少外記

永清

召使

宗岡行春

掃部寮

藤原利一

陣官人

橘久次

使部

官方

史

三善英信

大蔵省

不参也

主殿寮

重威

職秀

一、今日、吉書御覽也、刻限辰ノ刻、令着束带参内、召具布衣二天
白装二天、官務盈春宿禰被参、諸司各参集、

一、攝政殿依御寛楽御不参、上卿權大納言兼胤卿、弁左少弁資枝、申ノ上刻出御清凉殿、次第如去年、官方各於床子史下、吉書例文国名加賀云云、

一、於庭上、明日、上官例参如例、攝政殿可参哉、頭中将へ相尋之処、攝政殿政所去廿七日雖薨去、廿九日除服出仕被仰出、依之如例参可有、併シ依御寛楽御対面無之旨、被未刻参合諸司へ申渡候事、

一、出御以前以六位散状下、
吉書御覽
尤二枚有之、一枚官務へ進、

上卿

広橋大納言

弁

資枝

一、猶、九条殿諸大夫以手紙来ル、五日开始御盃被下間可参由、右参内故帰宅之後、御請使者進之畢、奉畏了、

一、今年明日、御礼奏者所・公卿之間へ通り、右京大夫取次以申上義、予旧年元服之御礼之時ヨリ始ル、依之外記史於里亭不侍、可令参内旨、官務被示畢、

一、明日、例参ニ付、例之通使部耆人可参旨、於御所申付畢、

四日 戊寅 天晴

一、今日辰ノ刻、令着狩衣参内、召具青士殿下・下部、左大史盈春宿禰・左大史知音同被参奏者所・公卿之間、右京大夫取次以年始御祝詞申上、聞召由御返答、退出、門下之諸司於御玄闕申上、

手札記于左

左大史

盈春

平田少外記

永清

左大史

知音

山口少外記

致当

大外記

師資

山口少外記

千俊

平田權少外記

中原職寿

山口權少外記

中原秀昌

山口權少外記

中原友興

宗岡式部少丞

經重

青木治部少丞

宗岡行本

宗岡右兵衛大志

宗岡経義

依所安不参
依所安不参
依所安不参

官方諸司

史

史生

官掌

交名略之、

次、女院内玄閤御祝儀如長橋御玄閤、次参摂政殿依御寛楽御対面無之、次近衛左府公以諸大夫申上、御返答聞召由、次久我右府公同言上御対面、御盃給退出、次参二条殿依御幼年無御対面、御雜煮・御酒等被下退出、次参九条内府公少々依御不例御対面無之退出、次参鷹司左大将殿如近衛殿退出後、外記史以下各被参、予出向口祝畢、盃冷酒ニテ温酒進メ之、暫時而各々退出、

五日 己卯 天晴

一、今日、所々参賀、先参九条殿令着狩衣給御対面、御盃賜御肴同賜令頂戴即刻御暇申受退出、其後官務式部權少輔令同道、閑院・伏見・有栖川^{同御裏、柳原}、兩伝^{伝、藤原}、議^{奏^{醍醐}・前小路^{正親町三條}、東久世}、兩頭^{油小路^{清閑寺}}、五位職事^{万里小路^{日野}・勲修寺}、信受院殿、葉室前大納言、庭田中納言、烏丸中納言、綾小路前中納言、正親町中納言。北小路中務大輔、小森差次藏人、從頭弁益房、白馬節会被付一通如例、刻限申ノ刻、別紙北ノ陣、未ノ刻陣官人老人可催由、今日、職事披露初如例、

六日 庚辰 天晴

一、今日、頭弁亭白馬請文使以進之、并北陣之儀御散旨申送了、請文披露初二昇進之方有之□書付可給、白馬散状同申受度旨申送了、則切紙来、

一、鷹司殿從諸大夫口狀書記于左、

口狀

明日七日節会之序、左大将転任之後着陣被成候、仍内々申入候、以上、

正月六日

大外記殿

一、官務申合、白馬節会如例以使部催之了、触文扣ニ記也、

種田丹後守

「つづく」

注

- 1 『地下家伝』、一九六八年、自治日報社、四〇～六七頁。以下、押小路家については註記のない限り同じ。
 - 2 前掲註1 『地下家伝』一九四～二〇八頁。以下、壬生家については註記のない限り同じ。
 - 3 下橋敬長『幕末の宮廷』一九二二年、図書寮、一七六～一七七頁。
 - 4 前掲註3 『幕末の宮廷』、一七七～一七八頁。
 - 5 西村慎太郎『近世朝廷と地下官人』二〇〇八年、吉川弘文館、一ページ。
 - 6 前掲註5 『近世朝廷と地下官人』二八頁。
 - 7 前掲註5 『近世朝廷と地下官人』六四～七四頁。
 - 8 『幕末公家集成』一九九三年、新人物往来社。
 - 9 ちなみに、維新後のことになるが、以寧の子壬生輔世（一八一～）が、明治二年（一八六九）二月に従三位に叙され、翌三年には終身華族に列せられ、昇殿も聴され、京都府権少参事に任じられ、その後、一八七六年（明治九）には永世華族に加えられた（柴山典『華族類別譜』附録卷之一、一八八〇年、屏山書屋、国立国会図書館「近代デジタルライブラリー」<http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1152037>）。さらに輔世の子で兄明麗（一八五二～）の跡を継いだ桃夫（一八五四）が一八八四年（明治一七）男爵に叙せられた（水野慶次『華族大系』一九一四年 系譜社出版部、国立国会図書館「近代デジタルライブラリー」<http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/950444>）。
 - 10 ラリー」<http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/950444>）。押小路家もこの例に拠ったものか、押小路師親が没するのと同一年一八七九年（明治一二）華族に列せられ、その子師成が一八八四年（明治一七）男爵に叙せられた（水野慶次『華族大系』一九一四年 系譜社出版部、国立国会図書館「近代デジタルライブラリー」<http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/950444>）。
- 『京都造形芸術大学紀要GENESIS』第十五号、二〇一一年。